

## 1 塩月桃甫の略歴と主な作品

稗 彩花

### 略歴

1886(明治19)年—0歳、宮崎県児湯郡三財村（現西都市）に生まれる。

1893(明治25)年—6歳、加勢尋常小学校に入学。

1897(明治29)年—10歳、高等小学校に入学。

1901(明治33)年—14歳、高等小学校を卒業後、代用教員となる。

1907(明治39)年—20歳、1909(明治42)年頃まで美々津小学校の教員を務める。  
この頃都農町でトキと結婚し塩月家の婿養子となる。

1912(大正元)年—26歳、大阪浪華小学校に勤める。

1916(大正5)年—30歳、教員指導にあたる傍ら、第10回文展に油彩画  
『山越しの風』が入選する。当時、木兆（ぼくちょう）の雅号で水墨画も描く。

1921(大正10)年—35歳、妻、長男、次男とともに渡台。・台湾総督府台北中学校の  
教員となる。

1927(昭和2)年—41歳、台北高等学校文芸部、絵画部の同人雑誌『足跡』の1号～3  
号の装幀を担当。同人には、塩月赴、浜田準雄、今沢正雄、土方正己、中村地平、陰  
山泰敏がいた。第1回台湾美術展創立に参加、審査員となる。

1928(昭和3)年—42歳、日本に一時帰国する。第2回台湾美術展の審査員となる。

1929(昭和4)年—43歳、第3回台湾美術展の審査員となる。

1930(昭和5)年—44歳、霧社事件発生。第4回台湾美術展の審査員となる。

1937(昭和12)年—51歳、トキ夫人逝去。日中戦争のため第11回台湾美術展が中止さ  
れる。

1938(昭和13)年—52歳、第1回台湾総督府美術展覧会（府展）の審査員となる。

1944(昭和19)年—58歳、府展が中止される。

1946(昭和21)年—60歳、宮崎に帰郷。中村地平と再会。短編集『太陽の目』の装幀  
を担当。

1954(昭和29)年、心臓弁膜症により死去。享年67歳。翌日塩月後援会主催により告  
別式が行われる。

## 【日本での教員時代】

塩月桃甫（しおつきとうほ）は1886年2月27日に宮崎県児湯郡三財村（現西都市）に生まれた画家である。本名は永野善吉（ながのぜんきち）で、旧佐土原藩士永野家の4人兄弟の3男である。

「教員時代の桃甫を知る人は彼のことを、自分の過去を話さないミステリアスな雰囲気もありながらおだやかで接し方に壁がなく、丁寧に毎回資料を作って教え子に授業をしていた。」「ほかの先生たちに比べとっつきやすかったため親しみを持ってツンドラ先生（帽子を外すと髪の毛が後頭部に一列だけ残っていたから）と呼ばれていた。」「ロイド眼鏡にトルコ帽の独特のスタイルだった」と述べている。当時木兆（ぼくちょう）の雅号で水墨画も描いていた。



「自画像」  
1946-1954(昭和21年-29年)  
宮崎県立美術館所蔵

## 【台湾時代】

1917（大正6）年台北一中、台湾高等学校教官として赴任した。やがて彼の湧き上がるような精神は台湾美術界の振興を図るべく、1919（同8）年から1921（同10）年にかけては、当時日本の新進作家であった藤島武二、梅原龍三郎などを審査員として招き、台湾の美術振興の基礎を大きく築いた。そして1927（昭和2）年台湾総督府美術展（台展）を創設した。台湾美術展覧会の審査員やその運営に尽力する一方で南国台湾のオープンで明るい人々や装飾性豊かな民族衣装に惹かれ数多くの素晴らしい作品を残した。以後25年間にわたり台湾で活躍したが、情熱を注いだ台湾美術展覧会の審査員問題や敗戦によって糾弾され、多くの作品を残したまま台湾を引き上げることとなった。

## 【宮崎での奮闘】

宮崎に引き揚げた桃甫は貧しい暮らしの中、ただひたすら筆を手に絵を描いた。その主な作品は台湾原住民族であるタイヤル族の少女が口琴を奏でている「ロボを吹く少女」（1924(大正13)年 県立美術館所蔵）また宮崎でも瑛九や川越篤といった地元の画家たちとともに県展（のちの宮日総合美術展）の立ち上げに尽力し、都合が悪くなった審査員の代わりとして審査員を務めることもあった。そして、宮崎の美術界の育成リーダーとなり大きく貢献した。

桃甫は宮崎に戻ってから亡くなるまで

の8年間で油彩やパステル画など約1,600点の作品を残している。主な作品は、「野生馬」（1946(昭和21)年 宮崎県立美術館所蔵）、「風景」、「婦人像」、「母子像」（1953(昭和28)年 宮崎県立美術館所蔵）などがあり、「裸婦」（1953(昭和28)年 宮崎県立美術館所蔵）は晩年最後の作品とされている。



「ロボを吹く少女」  
1924(大正13)年  
宮崎県立美術館所蔵



「野生馬」  
1946（昭和 21）年  
宮崎県立美術館所蔵



「風景」  
1953(昭和 28)年  
宮崎県立美術館所蔵



「母子像」  
1953(昭和 28)年  
宮崎県立美術館所蔵



「裸婦」  
1953(昭和 28)年  
宮崎県立美術館所蔵



「婦人像」  
1953(昭和 28)年  
宮崎県立美術館所蔵

### 【桃甫が伝えたかったこと】

桃甫の画法は、原色を使用し力強い色彩で、見て感じたまま何かに捉われることなく描くフォービズムだ。彼は台湾の少数民族の人々の生きざまを、力強く大胆に、激しく描くことで鑑賞者に自分たちが今までいかに表面的にしか物事を見ていなかったのか伝えたかったのではないだろうか。

#### 参考文献

みやざきの 101 人

<https://www.pref.miyazaki.lg.jp/contents/org/chiiki/seikatu/miyazaki101/hito/068/068.html>

(参照 2022. 8. 3)

UAG 美術家研究所, 「台湾美術振興に大きく貢献した塩月桃甫」,

<https://yuagariart.com/uag/miyazaki27/>(参照 2022. 8. 4)

上田雄二, 『一情熱・愛・詩情—塩月桃甫展』, 宮崎県立美術館 2001,  
P7. 8. 64, 102, 103, 104, 108

小松孝英「塩月桃甫ドキュメンタリー映画」

アートのスケープ

<https://artscape.jp/dictionary/modern>(2022. 8. 3 参照)

#### <註>

フォービズム…20 世紀初頭にフランスでおこった絵画の革新運動。野獣派と訳され、フォーブとも称される。